

## メビウスの堂々巡りと、数学的なネジ

副田一穂(愛知県美術館主任学芸員)

壁から3本のネジが飛び出している。プラスと、マイナス、そしてもう一本は「∞」。無限大のネジなんて、いったいどうやって締めるんだろう? でも考えてみれば当たり前だが、プラスとマイナスのネジだって効率よく締められるよう**そん**な**か**た**ち**をしているだけで、べつに数の正負やら加減やらで**数**学**し**て**る**つもりは毛頭ないのだ。

長い間、ネジの頭の溝は製造が容易なすりわり形、つまり一文字に刻むスタイルが主流だった。1906年になって日本で十字形の溝を持つネジが特許登録されたが製品としては普及せず、1933年に今度はアメリカで特許が登録された。その権利を譲り受けたフィリップス・スクリュー社が、ドライバーが溝からスリップせずにビタリとはまるよう改良を加えたものが、世界中で使われるようになり、製造業の生産効率の大幅な向上に一役買った<sup>1</sup>。そして日本ではいつしかこれをプラスのネジ、対置的にすりわりをマイナスのネジと呼ぶようになった。まさにその瞬間、溝の実用的な由来は忘却され、**数**学**的**な**ネ**ジ**が**誕生する。

### \*

35歳の若さでこの世を去った徳富満の生涯については、彼の親しい友人の一人でキュレーターの東谷隆司による美しい文章に、私が付け加えられることは何もない<sup>2</sup>。その東谷も他界して数年を経た2017年、愛知県美術館と豊田市美術館は、徳富家から息子・満の作品を取得した<sup>3</sup>。この寡作な作家が遺したいくつかのピースを繋ぎ合わせながら、彼が追い求めた世界を断片的にはあれ覗いてみたい。

1989年3月に東京藝術大学を卒業した徳富は、同期生の会田誠や小沢剛がレントゲン芸術研究所で耳目を集めるさまを横目に、寡黙とも言える作品を手がけていた。《三輪車》(1992)は、幼児用三輪車のハンドルを外し、代わりにそのハンドル自体を撮影した写真パネルを取り付けたものだ。漕ぎ手の位置からは見えない角度で撮影されたハンドルは、用をなさないばかりか実物の代理ですらない。道具の使用者の視野をはぐらかすこの構造は、《Face》(1993)にも引き継がれている。等間隔に並ぶ写真には、一台一台異なるカメラが写っている。写真の左端は蝶番で壁に固定されており、右から頁をめくるように起こすと裏面に各カメラの所有者の氏名が見える(たとえば小沢剛、白汚零、野村浩、丸山直文、福井篤、浅野達彦、など)。青山のスパイラルガーデン円形アトリウムを課題空間とする公募に提出したプランもまた、同様の構造を持つ<sup>4</sup>。中央に設置したメリーゴーラウンドを有刺鉄線で囲い、通路を隔ててそれをぐるりと監視するように36台のビデオカメラと同数のモニタを配置する。撮影映像をリアルタイムにフィードバックするこの閉鎖的なビデオ・インスタレーションは、受賞には至らず実現しなかった。だが徳富は、このアイデアを異なるかたちで見事に昇華する。《2D or not 2D》(1993)の原型とも言える《Untitled》(1992)では、巨大なメビウスの輪がギャラリーの内側を一周している。輪の外には天井の監視カメラを写した一枚の写真が、輪の内側には監視カメラの位置からギャラリーを撮影した写真が立てかけられている。便宜的に外／内としたが、メビウスの輪の性質上もちろんそれは外でもあり内でもある。鑑賞者は見

られながらつねに見ており、包囲されていながらすでに脱出している。

### \*

1994年から、徳富は視知覚についてより内省的な仕方でも考えるようになった。同年の《Flying Carpet》は、ランタン型と呼ばれるタイル風に成形した机の天板、緑色のキャンヴァス、オレンジ色のボタン留めした布張りのソファの背、空を撮影した写真を、一定の規則で繰り返しながら床に並べた作品だ。見上げたくなる青空も、もたれたくなるソファも、壁に掛かるはずのキャンヴァスも、みな床上数センチのところで水平に留め置かれている。

ものを見て知覚するプロセスの、その一番最初の、ほんの一瞬の出来事ってというのがまずありますよね。それはあらゆる意味でフラットな、僕らから意味を注ぎ込まれる前の景色というか、光の集合体を受け取っている状態というか。<sup>5</sup>

まばたきもせずにじっと何かを見つめていたことに、はっと我に返ってから事後的に気づく。「壁は壁、机は机」というオブジェクトの確かな感触を得る前の、部分的な性質のみを受け取っている状態。徳富は《Flying Carpet》からオレンジ色のソファの背だけを取り出し、新たに紺色の合皮張りのソファの背を加えて隙間を空けて交互に壁に掛けてゆく。床にはオレンジが2つ、紺色が1つ、壁から逃げ出したかのようにキャスターの脚を生やして転がっている。さらに今度は同じ2色を隙間なく壁に詰めて並べ、平面充填の長方形を作り出した。展示のたびに組み合わせと配列を変えながら、ランタン型のパーツは特定のオブジェクトとして固定化されることを逃れ続けている(前者は《Doctor’s Floor for Flicker of Otherness》、後者は《Crystallization》と名付けられた)。

### \*

1996年の初めに名古屋へ帰郷した徳富は、県の新進芸術家海外留学等補助事業対象者として、秋から「高品質写真フィルム制作工房であるロンドンのパーマプリント<sup>6</sup>」での2年間の研修へ赴いた。当時出入りしていた名古屋のコオジオグラフィャラリーが、80年代のニュー・ブリティッシュ・スカulptチャーや同時代のヤング・ブリティッシュ・アーティストを積極的に紹介していたことも、英国留学を後押ししたのだろう。ロンドンではダレン・アーモンドやデヴィッド・シュリグリー、ジュリアン・オピー、シヴォーン・ハバスカ、フェリックス・ゴンサレス=トレスらの展示に関心を抱いた徳富だったが、自身の制作はスランプに陥り、一切の手を止めてしまった<sup>7</sup>。

研修期間の2年が過ぎた1998年末、徳富はスタジオを移して心機一転、CGスケッチに没頭するようになった。多くは横長の画面を上下に分割し、下を緑で、上をピンクから青へのグラデーションで塗った背景に、ダム湖や川、河口と思しき3D地形モデルを左右に2つ並べる形式を採る<sup>8</sup>。大量のCGのうちいくつかは絵画化され(いずれも未完)、いくつかはデータの状態のまま〈a modest creation〉や〈輪郭の嵐〉というシリーズ名を冠している。

「何を言うか」以上に、「どんなふうに言うか」が重要に成りうる。「何を言うか」は「どんなふうに言うか」を実現するための口実にすぎない場合もある。<sup>9</sup>

まるで**手続**き型生成された**ローグ**ライクや**オープン**ワールドの**ゲーム**世界のように、徳富の地形モデルは単一で特定可能な場所ではなく、一定の規則でその都度出力されるものでしかない。ここでは内容(何を?)と形式(どんなふうにな?)の因果が逆転している。「∞」や「0」を添えることで、トルク伝達効率の代わりに**数**学**的**な**ネ**ジ**と**いう**偽**りの**内**容**が**、そ**っ**と**滑**り**込**む**か**の**よ**う**に**。

「何を言うか」以上に、「どんなふうに言うか」が重要に成りうる。「何を言うか」は「どんなふうに言うか」を実現するための口実にすぎない場合もある。<sup>9</sup>

- 出水力「本田宗一郎とプラス(クロス)ねじ：ホンダの現場にプラス(クロス)ねじの導入時期を巡って」『大阪産業大学経営論集』14巻1号、2012年および特許発明明細書第11466号(十字形溝螺旋錠)、U.S. Patent 1908080, U.S. Patent 1908081, U.S. Patent 2046837。
- 東谷隆司「徳富満 plus, minus, infinity」『Mitsuru Tokutomi: plus, minus, infinity』Osmosis、2006年。
- 徳富の父・洋司氏と母・洋子氏には作品取得にかかる手続きのみならず、徳富が遺したポートフォリオやデータ等の資料調査に際しても多大なご協力を賜った。記して感謝する。
- シヤチハタ工業株式会社による若手アーティスト発掘・育成のための公募展「ジャパン・アート・スカラシップ」(1990–99年)。徳富は第2回(1992年)に応募、第2次審査(マーケット審査)まで進んだ。グランプリは藤浩志。
- 「徳富満インタビュー」『男と女の同性愛』sagacho bis、スタジオタフ、1995年。
- 「若手芸術家 県の留学費用補助制度 今年度の対象者決定」『読売新聞』1996年8月3日。
- 徳富がロンドンで見た展示については、徳富の学生時代からの友人ら(浅野達彦氏、加藤磨珠枝氏、奈良美智氏、福井篤氏)による座談会で触れられている。「来春に特集展示を控えた故・徳富満とはいかなる作家だったのか」『AAC』114号、愛知県芸術劇場、2022年12月。またロンドン時代の徳富をよく知るライターの川出絵理氏からも教示を得た。
- 徳富は当時ビデオゲームの地形のモデリングに関心を寄せていた。また百科事典の挿図をモチーフに流用していたとの証言もある。前掲『AAC』114号。またこれらのCGスケッチについては徳富と親交のあったアーティストの横湯久美氏からも教示を得た。
- 徳富が書き遺したメモから引用。